

(国語)

## 子ども達が主体的に課題を追求・解決し、伝え合う国語科の指導

～伝えたいことを明確にして、自分の思いや考えが書ける子の育成～

大阪市立大和田小学校 研究部

### 1. 研究主題設定の理由

本校では、令和2年度より、研究テーマを「子ども達が主体的に課題を追求・解決し、伝え合う国語科の指導」として研究活動をすすめてきた。これまでの研究活動では、「思考力・判断力・表現力等」の育成に重きを置き、2年次からは、「読むこと」の領域に絞って取り組みをすすめてきた。その中で、読み取ったことを表現する力、根拠に基づいて自分の考えを書く力、文章を要約する力、さらには、基礎的な漢字の習得や、語彙力についても、課題がある状況が見えてきた。このことから、「書くこと」に重点をおいた指導を進めていくという観点があがり、国語科の研究の3年目のテーマとして研究実践をすすめてきた。

### 2. 研究の趣旨

国語科における本校の目指す子ども像

- 進んで読書や作文に取り組むことができる子ども
- 言葉を大切に表現できる子ども

○「書くこと」の指導でどのような資質・能力を育てることができると考えるか(研究仮説)

#### ①コミュニケーションの本質である自己表現力

国語科の「書くこと」を通して、「自分を知る」「他人を知る」「自分と他人の思いや考えに違いがある」ことを認識できる児童の育成につながるのではないかと考える。

#### ②「読むこと」につながる語彙力の向上と豊かな言語感覚

語彙力の向上や豊かな言語感覚は、「読むこと」を深める大きな資質・能力となると考える。

### 3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

#### 視点① 「書ける力」の向上

- ①「何も書けない」「書きたくない」ことからの脱却、自分の考え、思いを表現できる書き方を学ぶ授業づくりと評価方法
- ②「また書きたい」「もっと書きたい」思える題材の工夫  
2人ペアで自分の思いや考えを伝え合う「鉛筆対話」の活用  
(「鉛筆対話」は東京都足立区で教科指導専門員をされている安原由美子先生がこれまでに実践されたものを学び、本校でも実践した内容です。)

#### 視点② 「語彙力」(言語感覚も含めた)が育つ授業づくり

- ③「語彙力」の向上と「言語感覚」を育てる指導の充実  
語彙力が育つための指導者が学習中に自動への具体的な問いかけの工夫  
(1. 別の言葉に言い換える 2. 比べる・関連づける )

## 4. 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

低学年では、文章を書き始めることが苦手な児童に対して、身近な生活で使う言葉を多く見つけ出して、文章を書き始めることができるように工夫を行った。また、説明的文章を読み取るときには、「名前」「役割」「つくり」「理由」などの要点に着目しているかを確認して、文章を書き始めることができるように指導を行った。文章の書き始め方や具体的な内容を示すことで、安心して書けるようになってきた。「写真で一言」「この後どうなる」など自由な発想で思いついたことや考えたことを書く学習でも「もっと書いてみたい」という児童が多く見られるようになってきた。

中学年では、説明的文章を読み、筆者は読み手に何を伝えようとしているのかという観点から筆者の書き方の工夫を学習してきた。筆者の考えについて「どちらがよいか」「賛成か反対か」など、自分の立場を明確にしたうえで、その根拠を説明的文章の中から書くことができるようになってきた。また、「鉛筆対話」を取り入れた新たな学習では、これまでは自分の考えを表現するだけで終わってしまっていた活動について、自分の考えを見直し、再構築するきっかけとなることができた。

高学年では、テーマに合う文章や資料から必要な情報を見つけ出し、そこから自分の考えを表現できるように学習を進めてきた。文章や資料をもとに自分の考えを書くことについて多くの児童が好意的にとられて、積極的に自分の考えを書ける児童が増えてきた。さらに5年生、6年生がペアになってすすめた「対話ノート」の取り組みでは、始めは質問に対して答えを書いているだけであったものが、「対話」を意識して話が続くように返事を書くようになり、共感できることを書き表せるように成長してくる児童が多くみられるようになってきた。国語の学習だけでなく他の教科においても「何を書いていいかわからない」ととまどう児童は少なくなっており、これまでよりも自分の考えや伝えたいことが「書ける」ようになったと実感が持てるようになってきている。

### (2) 今後の課題

「伝えたいことを明確にして自分の考えを書く」ことについては、自分の考えや思いを積極的に書けるようになってきているが、その内容が読み手に十分に伝わるまでにはなっていない。「基本的な助詞の使い方」がまだ不十分な児童については、「本を読む」「学校へ行く」など、音読による音声での語句の習得と文字での理解とを合わせてできるように、「聞く」ことから「読む」、「読む」ことから「書ける」ようにするまでの段階的な指導が今後も必要であるといえる。

自分の考えをまとめるときには、自分の立場については論理的に書き進めるようになってきているが、反対の立場の意見については、その意見の内容を理解したうえで根拠を示して書けるようにするためにさらなる指導が必要である。

「語彙力の向上」や「豊かな言語感覚」については、国語科だけではなく、日々の学習指導の中で指導者が適切な語句を使って指導にあたることや、児童の発する語句に対しての感性をよりよいものにすることが、児童の語彙力・豊かな言語感覚が育つ土壌となる。学校全体での語句に対する系統的な取り組みは今後とも継続して行うことが必要である。